

1 自己評価及び外部評価結果

事業所番号	0673000659		
法人名	株式会社 狩川佐藤組		
事業所名	グループホームやまゆり		
所在地	山形県東田川郡庄内町狩川字小縄3-3		
自己評価作成日	平成 29年 1月 25日	開設年月日	平成 17年 6月 13日

※事業所の基本情報は、公表センターページで検索し、閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/06/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 エール・フォーユー		
所在地	山形県山形市小白川町二丁目3番31号		
訪問調査日	平成 29年 2月 22日	評価結果決定日	平成 29年 3月 13日

(ユニット名 寿々花の家)

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者にとって居心地のいい環境になるよう、また、互いに助け合う環境の中で生活ができるよう、その人に合った役割をもっていただいています。加えて、『家族とのつながり』に力を入れ、家族も参加ができる行事の企画や手紙やメールを活用して情報交換を行うなど、つながりを大切にしており、より一層、家族様と一緒に利用者の生活を応援することができるようになりました。介護事業部理念の『考える介護』をいつも頭に置き、工夫しながら利用者が笑顔で生き生きと生活できるように、また、職員が楽しいと感じることが出来るようにしながら、日々の仕事に取り組んでいます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

理念「考える介護」を実践するにあたり常に利用者・家族の思いに寄り添い、関わりの中で見えた課題を皆で検討しサービスにつなげ、毎年、ユニットごと利用者・家族のニーズに合わせた目標を作って達成に向けて取り組んでおり、その一年間の積み重ねが理念の実践へとつながっています。グループホームやまゆりを生活の場と捉え、皆で植えた野菜の収穫やデザート作り、外食や買い物など様々な場面で活動する利用者の元気な姿があり、「広報やまゆり」にも輝いた顔で載っています。また、事業所独自の取り組みが多く「利用者会議」や「メールでの情報共有」「エンディングノートの活用」など支援や業務を工夫しながら管理者・職員は認知症を深く理解し自己研鑽を行い、サービス・ケアの質向上に励んでいます。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
55	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	62	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
56	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,37)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	63	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
57	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	64	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
58	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:35,36)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	職員は、生き生きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
59	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:48)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:29,30)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
61	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

山形県地域密着型サービス「1 自己評価及び外部評価(結果)」

※複数ユニットがある場合、外部評価結果は1ユニット目の評価結果票にのみ記載します

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業部の理念『考える介護』を、職員がいつでも確認できるように事務所に掲示し、理念を達成させるためのユニット目標をパソコンを起動する為のパスワードにして、常に意識できる状況としている。加えて事業計画書は各ユニットにあり、いつでも目を通せる状態にしている。	常に「考える介護」を意識して日々のケアに取り組んでいる。年度初めに職員皆で利用者・家族の要望をふまえたユニット目標を作り朝礼や会議で振り返り、一年間かけて達成した積み重ねが理念の実践につながっている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	見守り隊や買い物等、地域に出ていく場面作りや、やまゆり祭を始めとする各行事に、地域の方々を招いたり、中高生の実習やボランティアの受け入れも行っており、普段から地域との交流も自然に図る事が出来ている。	利用者は天候に恵まれる春頃から地域の子供達の見守り隊として活躍し、買い物などで顔馴染みとの再会を楽しみにしている。やまゆり祭は回覧板やスーパー等に案内広告を載せ、地域の祭りとして親しまれるほどになっている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議を通じて、認知症への理解を深めて頂けるように働きかけている。また、キャラバンメイト養成講座を受け、保険者と共に認知症サポーター講座の開催も行っている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回、会議を開催し、やまゆりの現状を見て頂いている。時には行事に参加する場も設け、利用者の表情や様子を観察して頂いたり、アンケートや話し合いでの意見を参考にサービス向上に取り組んでいる。	時節にあったテーマをもとに家族代表や2地区長、行政の参加を得て2か月に1回開催している。参加者からは避難訓練時の動画を見てもらったり、やまゆり祭のアンケートなどアドバイザーとしての意見をもらいサービスに活かしている。	地域の方や家族などが参加しての運営推進会議が定着できている。職員側も幅広く参加してもらい、地域との繋がりをより実感できる取り組みに期待したい。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事務手続きに限らず、分からない事等への相談・協力体制は出来ている。また、アンケートや認知症サポーター養成講座などの町の事業に協力し、良好な関係を築いている。	管理者は認知症カフェのスーパーバイザーや審査会委員などに携わるなど地域の連携に大きく係っており、役場や社会福祉協議会と良好な関係を築いて互いに協力体制が出来ている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、環境や利用者の状態を考慮しながら、玄関に鍵をかけない工夫や、身体拘束をしないで過ごせるような工夫に取り組んでいる	夜間を除き、玄関などの施錠は行っていない。帰宅願望のある利用者もいるが、適度な運動や話に耳を傾ける時間を設け、穏やかに過ごして頂けるような支援をこころがけている。基本的には、十分な見守りと玄関チャイム等の確認で対応している。他棟との仕切りになっている扉も施錠はしていない。	年度初めに研修を行うと共に認知症を理解して気持ちに寄り添うケアに努めている。不穏な方には皆で対応を検討し、利用者の意思を尊重して一緒に出かけ本人が納得して戻りたいと思うように「考える介護」で支援している。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	職員会議や自施設内研修を有効に活用すると共に、虐待のニュースがあった場合など、新聞やインターネットからの記事を事務室へ掲示したり、注意喚起も行い防止に努めている。			
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前は、地元の社会福祉協議会の日常生活自立支援事業を利用している方がいたので協力していたが、今は直接事業に関わる機会がない。こういった制度への理解は以前と比べれば乏しいと思われる。			
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居が決まった方に対しては、契約を結ぶ際に疑問に思う事、分からない事等を聞きやすくする為にも、重要事項説明書と契約書を事前に渡し、確認をして頂いている。契約時や契約解除時にはご利用者と家族と話し合い、納得を頂いている。			
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	毎月、利用者会議を開催して意見等を聞いている。家族の来居時にも意見や要望が受け入れやすい関係作り心掛け、話し辛い事に関しては設置された目安箱を利用してもらっている。また、年1回のアンケートや担当者会議などでも確認をしている。	利用者の司会で利用者会議が行われ、これからの行事に興味をもってもらい毎月皆で頑張る目標を決めている。家族等とはお便りやタイムリーなメールで連絡を密に行い、接遇や要望などのアンケートで運営に反映させている。		
11		○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員から出された意見を会議の議題として取り上げ、皆で検討している。また法人全体の事に関しては、リーダー会議を設け、そこで各ユニットで出た意見を反映させている。			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	シフト表作成にあたり、毎回勤務の希望を聞いて対応している。資格取得者には資格手当が支給され、頑張る意欲にも繋がっている。			
13	(7)	○職員を育てる仕組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	自分ケアプランを作成し、一年を通して目標達成につながる様に取り組んでいる。施設内では毎月研修会が行われ、知識の向上を図っている。新人職員に対しては個人の目標を作り、定期的にミーティングを行い、不安な事・出来ない事・聞きたい事等を話し合っ人材育成に繋げている。	自分ケアプランは1年間どこまで能力を伸ばし可能性を引き出せるかチャレンジする目的で作成し、他職員からの評価も行われ能力向上に役立っている。今期は内部研修で「認知症の理解」に集中して取り組み、基礎を積み意欲向上を図っている。	内部研修も充実している。その取り組みを活かして、更なる目標にむけて職員の意識向上と自発的な学びに期待したい。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
14	(8)	○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	毎年一人ずつ交換研修に参加し、お互いのホームの良い点・悪い点を検討し、サービスの向上に繋げている。また、グループホームの体育祭や認知症の講座等を通じて連携を図る機会を設けている。現在、顔を合わせる機会の確保のため、町内の多職種連携を進めている。	同業者との交流は管理者を中心に積極的に行い連携に努めている。交換研修では山形県グループホーム大会に参加して他事業所との意見交換でグループホームのあり方を学び、サービスの質向上に取り組んでいる。	同業者とは必ずしもグループホーム職員とは限らず、他の介護サービスに勤務する職員との交流の機会を持つなど、視野、視点が広がる取り組みに期待したい。	
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前面接や関係機関からの情報を職員が把握し、本人の現在の状況を理解する様に努めている。他の利用者と活動を共にする等、早くホームに慣れてもらうように支援を行っている。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の悩みや要望についても、介護計画に反映する事を心掛け、なるべく家族の言葉そのままを活用するようにしている。また、普段の何気ない会話から得る情報も大きいので、面会時には必ず声を掛けるようにしている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族や居宅のケアマネを含めた事前面接で、今すぐに必要な支援は何なのかを話し合い・見極め・調整を行っている。入居後も、家族や関係機関と相談行い対応している。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者からは、調理や掃除など出来る事を積極的に行ってもらっている。また、センター方式Dシートを活用し、出来る可能性について常に考え、出来た時の喜びを感じてもらえるような生活をして頂いている。			
19		○本人を共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族には『お便り』や『メール』という形で、毎月情報を伝えている。利用者に変化が見られた時には電話で知らせる様に心掛け、家族からの協力も頂きながら支援をしている。また、家族参加型の行事も取り入れて、つながりを深めるようにしている。			
20		○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	友人や知人の面会の際には、利用者が安心して話が出来るように部屋へ案内するなど、話しやすい環境を作り、必要であれば、その場に職員が寄り添ったり帰る際には一緒に見送りをを行うなど、今後の関係も維持出来るような支援をしている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者それぞれの性格を考慮し、ホールで楽しく過ごせる様な環境作りを行っている。状況に応じて席替えも行い、必要時には職員が介在している。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	次の入所施設や入院先、家族から情報提供を求められた場合には、しっかりと対応している。退居後であっても家族から相談を頂く事があり、こちらで出来る事であれば相談対応を行っている。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	センター方式Cシート・Dシートを活用し、本人の希望や思いを聞き出しており、加えてモニタリングや課題分析の充実も図っている。個々の問題解決やニーズの把握に努め、3ヶ月に1回の定期的なケースカンファレンスに加え、退院後など必要時にも行っている。	センター方式の心身情報は更新時に利用者・家族等・職員から聞き取り書き直している。新たにエンディングノートの活用で今まで聞けなかったことにも言葉があり、日々の気づきや情報は日報や申し送りノート、夜勤者からのメールで共有している。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	関係機関からの情報提供や家族から聞き入れた情報は、個人の台帳や申し送りノートを活用し、全職員が把握できる様にしている。また、入居後に新たに加わった情報があれば、申し送りを行っている。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各利用者の心身状態を考慮し、気分的な落ち込みが見られた場合は傍に寄り添い、その都度出来る事に配慮しながら、皆で協力し合える環境作りに努めている。また、時系列に記録を行い、一日の過ごし方が見える記録をしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画を作成する前には、必ず、本人や家族などの意向を取り入れて作成を行っている。加えて、3ヶ月に1回カンファレンスを行い、本人の求めるケアや可能性について探っている。更新に合わせて、年に1回は、本人・家族を交えた会議の開催も必須としている。	利用者の思いを大切にプラン作成し、ケース記録やモニタリングに基づいて3カ月に1回課題やサービスについて検討している。また、支援中に状況の変化やニーズがみられた時はプランの見直しを行っている。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護計画に沿った記録を心掛けると共に、日常の様子が見える様な記録を残すように努めている。毎日の記録から課題が見付かった時には新たに介護計画に取り入れている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
28		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地元のボランティアによる歌や踊りの披露や施設訪問などは、生活の励みや楽しみに繋がっている。近所のスーパーでは、知人との再会の場になっており交流を図る事が出来ている。			
29	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、かかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎月、協力医が往診にて健康管理が行われ、相談に対しての指導も受けている。他の医療機関を受診している場合は、家族から協力を頂き、その際には情報提供をしっかりと行い、結果についても常に共有出来る様に努めている。	希望する医療機関をかかりつけ医にしている。往診のある協力医は内科・精神科・皮膚科・歯科などがあり医療連携が出来ている。家族付き添いの医療機関には文書で情報提供し結果も共有している。		
30		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の体調変化を観察し、特変時には協力医院を受診している。受診の有無に迷う時には、かかりつけ医院の看護師に相談してから決めており、受診後の処置などに関しては指示通りに対応している。施設の職員や看護師には一斉送信メールで日々の利用者の様子を伝えている。			
31		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、入院治療が必要な可能性が生じた場合は、協力医療機関を含めた病院関係者との関係づくりを行っている。	入院した場合は、早い段階から家族と連絡を取り合い情報収集に努めている。合わせて、病院の医療相談員とも情報交換を行ったり、実態調査を行ったりしながら、早期の退院に向けての準備や支援を心掛けている。			
32	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、医療関係者等と共にチームで支援に取り組んでいる	介護保険の更新時、家族との面会の中で重度化した場合の話し合いを行っている。医療依存度が高くなり、対応が困難になりそうな時には、家族や関係者と今後についての話し合いの場を設けている。将来的に看取りの実施を目指し、研修会などの開催も行ってきたが、現時点では目途は立っていない。	重度化した場合の文書化した指針があり、家族等にも説明し理解をもらっている。年1回家族との話し合いがあり、状況によっては他施設の情報も伝えながら今後の方針を確認している。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容		
33		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	事故や緊急を要する場合には、勤務者で協力し合い、緊急マニュアルに沿って対応を行っている。緊急時の対応については、事務所内に最低限の内容をまとめた物を大きく掲示している。急変時の対応については、毎年研修を行っている。一斉送信メールも急変時には活用している。				
34	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、全体で防災訓練を行っている他、各ユニットでも独自の避難訓練を実施している。消防署も交えた避難訓練では、トリアージの視点も持って行動するように指導を受けた。また、東日本大震災後から各自のネームの中に震度6強以上となった場合の行動基準を入れて持ち歩いている。一斉送信メールも訓練時には活用している。	6月に夜間・地震想定訓練を職員には実施日を当日に発表して危機感をもって行っている。11月には消防署立ち会いで夜間帯に震度6想定、夜勤者と遅番での対応、他職員には一斉送信メールの訓練を実施している。非常持ち出し袋や防災頭巾も備えユニット訓練で使っている。			
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援							
35	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	寿々花の家の目標である、『笑顔と元気はありがとうから』を共通認識とし、利用者に対しての声の掛け方や接し方を工夫している。「ありがとう」をしっかり伝えたり、利用者の話をゆっくりと傾聴できるように意識している。	年度初めのプライバシー保護等や年6回の認知症を理解する内部研修を通して接遇や言葉遣いを学んでいる。利用者の輝きをひき出し仕事や活動にやりがいをもってもらい、職員は必ず感謝の言葉で気持ちを伝えている。			
36		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の訴えに対しては、ゆっくりとした気持ちで耳を傾け、本人の思いを聞き出す様な対応を心掛けている。時間がかかっても自分で選ぶ事ができるように支援を行っている。				
37		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	その日の気分や状態に合わせて、各利用者が出来る事に合わせて一緒に活動を行っている。時間がかかっても、本人のペースで日常生活が営める様な支援をしている。				
38		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に出張理容を依頼し、希望に沿った身だしなみが出来る様にしている。また、外出や行事の際はちょっとおしゃれをし、衣類の着方が不十分であれば、さりげなく手を貸して整えている。				
39	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	メニューは職員が作成するが、利用者の嗜好をふまえた食事を考慮に入れて提供している。食事の準備や後片付けと一緒にいき、それぞれの役割を、持っている能力に合わせて活かしている。また、職員も一緒に食べる事で美味しい事を表現しながら伝える事が出来ている。	長年の献立の中から好評だった食事を選び下準備から利用者も手伝い皆で調理している。事業所内の畑で採れた野菜の調理法を話し合っって食卓に上がることも多く、行事時には家族も一緒になって楽しく食している。			

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養の偏りがない様にバランスの良い食事を提供しており、旬の野菜も取り入れ、季節も感じて頂いている。毎日の摂取量・水分量もチェックを行い、量を見ながら声掛けを行っている。必要な場合には食事形態を変えて対応している。		
41		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、職員が付き添いブラッシング行っており、不十分な方には介助も行い清潔を保持している。歯科医による定期的な口腔ケアの指導を受け、内容に沿った支援を行っている。		
42	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	仕草を見ながら誘導を行い、尿意が無い方であってもオムツに頼る事が軽減出来る様にトイレ誘導を行っている。時間を決めてトイレ誘導している方もおり、失禁回数も減少している。オムツ券などの活用も行い、家族の金銭的負担にも対応している。	利用者一人ひとりに合わせて排泄チェック表を活用しながらトイレでの排泄を支援している。また、トイレ便座の配置にも動線を考え利用者も介助者も使い易く工夫している。	
43		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分の摂取や適度な運動、腹部のマッサージを取り入れたり、できる限り自然排便出来る様に対応をしている。また、全利用者の排便チェックを行い、医師や看護師の指示を仰ぎながら、状態に合った対応を心がけている。		
44	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、事業所の都合だけで曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	基本的には週3回の入浴を楽しんで頂いており、気分不快や体調不良で入れなかった場合には、翌日に入浴できるように配慮している。また、ゆず湯などのお楽しみ入浴の日を設定し、季節を感じて頂いている。	週3回を目途に朝バイタルチェックを行った午前中の中の入浴を基本としているが、状況に合わせて柔軟に対応している。全身観察や転倒防止に気を付けながら、ゆったりと入ってもらい季節にちなんだお風呂も楽しんでいる。	
45		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間、ゆっくりと休める様に、日中はホールで過ごす時間を多く持ち、心地の良い疲労感がもてる様な支援を心がけている。		
46		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬錠表は個人のファイルに綴り、把握できるようになっている。薬の変更等は申し送りノートを活用し、全職員が共有出来る体制作りをしている。服薬により変化があった場合には、主治医や薬剤師に相談している。誤薬しないように服薬チェック表を用いて薬の確認をしている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
47		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	アセスメントを活用して特徴を活かした役割を見つけ、個々の状況に合わせて楽しみ事やリフレッシュが図れる様に支援を行っている。			
48	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	普段から散歩をよく行うようにし、天気の良い日は、できる限り外に出るようにしている。職員の体制や天候等を考慮しながら、希望があれば近くまで景色を見ながらドライブに出掛けることもある。家族からも外泊や外出の機会を作ってもらい、家族との時間を大切にに使っていただいている。	通学時の見守り隊や畑仕事などを張り合いにして外に出る場面が多く、スーパーへの食材買い出しにも出かけている。春からは2カ月に1回花見ドライブを楽しみ、テラスでの流しそうめんでも季節を感じてもらい笑顔の写真を広報に載せている。		
49		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	全ての利用者のお金はホームで預かり管理しており、保管場所には鍵をかけ、利用者が安心出来る様に対応している。職員と一緒に買い物に出掛けた時に、お金を預け、自分で支払いして頂く場合もある。			
50		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば手紙を出す事は可能であるが、そういった要望がないため、やまゆり祭の案内状や年賀状を郵送するなどには、利用者から書いていただき、購入や投函などの支援をしている。			
51	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関やホールには、季節に合った花や装飾を行う事で季節を感じてもらっている。また、自然にホールに集まりたくなる様に、仲の良い利用者同士と一緒に席を囲める配置を考えている。温度や湿度にも配慮を行い、時間を決めて換気に取り組み、少しでも快適に過ごせる様な環境作りを行っている。	ホールの雛壇飾りが季節を感じ、食事の準備や洗濯物干し、モップがけなどホールで過ごす方が多く居心地の良さが窺える。時には廊下隅で井戸端会議が始まることもあり、生活の場としての環境づくりを心がけている。パート職員による清掃で清潔保持に努め、消毒液等で感染症を予防している。		
52		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	それぞれのお部屋はもちろん、ホール内には食事の席の他に所々に椅子やソファを置き、くつろげる空間を設けている。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況		実践状況	
					次のステップに向けて期待したい内容	
53	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に、これから過ごすお部屋に持ち込める物の説明を行い対応している。家族との思い出の写真や遺影を置く事で、少しでも安心した生活を送っていけるのではないかと感じている。		身体状況や意向に合わせてベッドを配置し、馴染みの物を持ち込んで安心して暮らせるようにしている。2ユニットとデイサービス3棟の夜勤者が交替で1時間毎巡回して安心安全につなげている。	
54		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設全体(玄関・ホール・廊下・トイレ・浴室)には、手すりや備え付けの椅子が設置され、活用する事で出来る範囲が広がっている。また、3ヶ月に1回のカンファレンスでの話し合いも含め、個々の状況を話し合う場を設けてケアプランに取り入れ、支援をしている。(必要時は随時)		/	